第 7 回国際日本学コンソーシアム「多文化共生社会に向けて」
2012 年 12 月 17・18 日　於：お茶の水女子大学

小野小町伝説における遊女像

台湾国立政治大学大学院生　　林 怡伶

小野小町は、古代末・中世を通じて、歌物語における歌人としてだけでなく、様々な説話において恋多き好色の女として、さらには遊女としても描かれている。

小町を遊女とする嚆矢は、平安時代後期に成立したといわれる『玉造小町子壮衰書』である。その後、室町時代に入ると、小町は明確に遊女と描かれるようになり、遊女としてのイメージが定着していくこととなる。

本報告では、これら史料から窺える遊女小町像の内、「色好み」譚と、遊女小町を観音菩薩の化身とする「観音菩薩変化」譚に注目し、中世社会における遊女の位置について検討する。

まず、色好みについては、『小町草紙』の一節にある「小町は、男にあふこと、まづ、千人としるしたれども、逢うて逢はぬとも見えたり」に注目し、ここから、相手を選ばず、求めてきた相手の要求に応じ、偽りの情で、愛を施す、つまり利他行為に徹する遊女像が明らかにする。

次に、観音菩薩変化譚については、遊女小町が多くの男たちのために身を犠牲にし、ある意味「救い」を人々にもたらしたことから、人々を仏道へ導き救済する観音菩薩の化身とみなされたことを指摘する。

そしてこれらの検討結果を踏まえた今後の研究展望として、かかる観音菩薩変化譚の流布が、遊女の生業を、一個の分業として社会に認知させる契機となったとのではないか、という見通しを述べたい。